

小学校英語における教材についての考察

島内直英

An observation on the teaching materials at elementary schools

Naohide Shimauchi

1 はじめに

現行の「小学校英語」が、平成32年度（2020年）から大きく変わることになった。小学校3・4年から「英語活動」が始まり、5・6年では、教科「英語」が導入される。すでに、先行実施に着手した自治体もマスコミでは紹介されることも多く、保護者の関心も高まっている。

2004年から導入されている現行の指導要領が改訂される理由は、どこにあるのだろうか。グローバル化という言葉が鍵であり、ボーダレス化する産業構造の変化への対応や、少子高齢化を迎える日本の生産性向上や福祉の維持・充実のための外国人労働者の増加や移民受入も必要になることは当然である。

ところで、文部科学省が2014年に実施した調査「小学校英語の現状・成果・課題について」¹⁾によると、中学1年生の約7割が、小学校で「英単語・文を読む」「英単語・文をもっとしておきたかった」と回答している。中学生が「英語を嫌い」としている理由の中で、「英語が読めないから（50.4%）」というものがトップである。中学校で文字がでてくるのであれば、小学校で文字を教えておいて欲しいというのも説得力がある。

新課程が目的を達成するためには、①時間の確保、②指導方法の確立、③教材の精選の三項目があると考えられる。各項目について課題となっているポイントに簡単に触れるにとどめ、本稿では主に教材の在り方について考察をしてみたい。

① 時間の確保について

多様な外国人との意思疎通に不可欠な共通言語として英語の存在感が強くなるのは想像に難くない。そもそも国際理解教育のための「英語活動」であったので、言語の習得よりも異文化理解に重きがあり、継続した英語学習という観点が弱い。

アジアでの英語への取組みがどのようになっているかについて、先の資料に中国・韓国・台湾と日本の比較表がある。大雑把であるが、中国は小3から週4コマ以上、韓国も小3から週2コマ、台湾も小3から週2コマとなっており、週1コマという日本の取組みで十分であるか不安を覚える。

② 指導方法について

学級担任または外国語を担当する教員（ネイティブ・スピーカーや外国語に堪能な地域の人々の協力）という現状は、さほど変更はなさそうである。再課程認定では、小学校課程にも英語指導法が導入されることになっている。その単位数が十分であるかは別にして、圧倒的に多数を占める未履修の先生方の不安と疑問への対処が課題であると考ええる。

筆者は昨年度と今年度、免許更新研修を担当したが、参加者の危機感を感じるコメントがあった。これまで英語活動の指導は、5、6年担任のみであったが、これからは3、4、5、6年担任が英語を担当することになったこと。他教科のような教師用教科書がないために、指導法がわかり難いというものが一番気になった受講理由であった。

反面、幼稚園などからの参加もあり、外国人の子どもが入園している事例も増えているようであり、幼児英語教育の充実も経営上重要な戦略になっているようである。

③ 教材の精選について

文部科学省から提供される教材や資料は、Hi, Friends. Plusなどがあり充実している。年間計画や指導法などもあり、動画などでも順次配信されている。使用法については、各教育委員会等に委ねられている。

ただ、そのまま使用できる教材としての配布ではないため、現場ではいくつかの課題がでてくるようだ。予算や教材が不十分であり、学校によっては、カラー印刷を十分に活用できないところもあるようだ。結局、他教科のような教科書と指導書が不在であることが、指導者の不安を増大させている。

④ 英語学習の必要性への国民意識の涵養

そもそも、日本語の指導は、どのようになっているのだろうか。かつては、幼稚園でも文字を教えないというところもあったと思うが、今では普通に文字を教えているところが増えている。国立国語研究所（1972）²によると、幼児の読み書き能力については、5歳児で21文字読めるのは52.8%、60文字読めるのは33.7%である。このころの児童は、「仮名の発見期」と呼ぶひともある。ベネッセ総合教育研究所が行った調査³においても、仮名が読める割合は6歳で90%、書ける割合は76%となっている。文部科学省が作成した資料⁴では、仮名が読める男女別の割合は、年長児で男92.1%、97.7%と5ポイント差があることが興味深い。

英語を出来るだけ早く教えてという保護者の熱意もうなづけるが、教科として導入ということになると、生涯学習としての位置づけについての国民のコンセンサスの確立と入念な計画が必要と考える。

2 読解力について

意外なことに、OECDの実施している調査⁵では、日本人が一番読解力が高いという結果がある。（PIAACが2009年実施。対象は24カ国の160,600人。）

500点満点で、日本人は、296点であり、米国は270点である。米国連邦教育省（U. S. Department of Education）が2003年に実施した調査では、米国人の14%が読むことができず、このbelow basic

と分類される学生の55%が高校を卒業していない事実を公表している。さらに、同調査では、囚人の70%が4年生未満の読み書きレベルであるとしている。貧困対策が望まれる所以である。

米国は、ブッシュ元大統領が2002年に署名した「落ちこぼれ防止教育法 (MCLB:No Child Left Behind Act)」以来いくつかの教育施策に取り組んでいる。

韓国では、英語公教育強化政策推進にともない、公教育の場以外で実施されている英語教育にかかる諸費用(私教育費)と、英語私教育ブームの異常過熱化による「英語格差(English divide)」が深刻な社会・政治問題として大きく取り上げられるようになり、一大国民的関心事となった。日本でも「格差社会」という言葉が出てきており、小学校英語の導入にともなって、英語関連の民間学習機関の隆盛ができてきそうな気配である。

表2 16～65歳の成人の読解力の国別平均得点

平均得点	国名	平均得点が統計的に有意差がない国
296	日本	
288	フィンランド	
284	オランダ	
280	オーストラリア	ノルウェー、スウェーデン
279	スウェーデン	オーストラリア、ノルウェー
278	ノルウェー	オーストラリア、スウェーデン
276	エストニア	チェコ、ベルギー
275	ベルギー	チェコ、エストニア、スロバキア
274	チェコ	カナダ、エストニア、韓国、スロバキア、ベルギー、イギリス
274	スロバキア	カナダ、チェコ、韓国、ベルギー、イギリス
273	カナダ	チェコ、韓国、スロバキア、イギリス
273	OECD 平均	カナダ、チェコ、韓国、スロバキア、イギリス
273	韓国	カナダ、チェコ、スロバキア、イギリス
272	イギリス	カナダ、チェコ、デンマーク、ドイツ、韓国、スロバキア、アメリカ
271	デンマーク	オーストリア、ドイツ、アメリカ、イギリス
270	ドイツ	オーストリア、デンマーク、アメリカ、イギリス、キプロス
270	アメリカ	オーストリア、デンマーク、ドイツ、イギリス、キプロス
269	オーストリア	デンマーク、ドイツ、アメリカ、キプロス
269	キプロス	オーストリア、ドイツ、アイルランド、アメリカ
267	ポーランド	アイルランド
267	アイルランド	ポーランド、キプロス
262	フランス	
252	スペイン	イタリア
250	イタリア	スペイン

- OECD 平均よりも統計的に有意に高い国
- OECD 平均と統計的に有意な差がない国
- OECD 平均よりも統計的に有意に低い国

出所：OECD (2013a) Figure 2.2a.

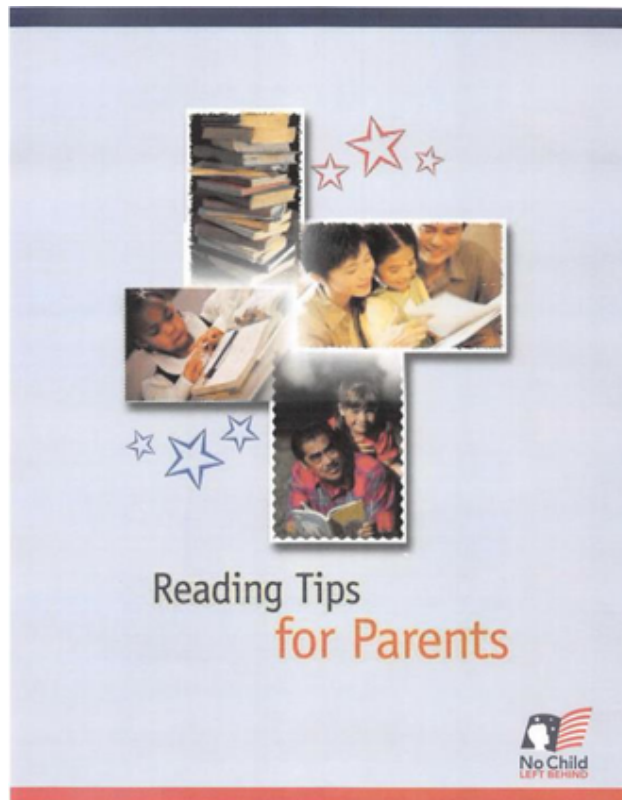
3 米国における教育課題と「保護者の協力」 ーフォニックスが重要視されるようになった理由ー

日本語は52文字の「かな」があり、発音は26音程度である。日本語は、文字と発音がほぼ一致している。かなは表音文字であるために、文字を読むとその文字が指すものをイメージできる。もっとも、少数ではあるが例外も存在する。例) /watashi wa/ 「私は」、/○○e iku/ 「○○へ行く」

一方、英語はアルファベット26文字に対して、母音子音52程度の音素がある。当然のことながら英語は一つの文字が複数の音を表すことになる。そこで、文字のつながりによって異なる発音の法則性を指導する方法がフォニックスと呼ばれるものである。

NCLBのもとで、①音素認識、②フォニックス、③流暢さ、④語彙、⑤理解に細分化した、「科学的な読みの研究」が取組まれている。米国連邦教育省のホームページには、「親のためのリーディング指導法 (Reading Tips for Parents)」⁶があるのは、日本も見習うべきことではないだろうか。

日本語で幼児向けにひらがなを描いたポスターもあり、米国にもアルファベットのポスターがある。発音の法則性が複雑なために、英国でも米国でも、英語学習のための絵カードが数多く市販されている。英語が母語である国ですら、このような努力をしている。外国人である日本では、どのような工夫が必要であろうか。学校と家庭での学習のあり方も検討する時期にきていると考える。



No Child Left Behind の表紙

4 英語活動の早期化の条件

(1) 国際理解教育からの脱却

英語学習先進国である中国、韓国では、日本よりも早くから、週2時間の英語を学習している。もともと日本では、外国語活動は国際理解教育のために設定されている。教科化を推進するのであれば、目標もさることながら、指導体制の構築も必要である。

(2) 「学び」のプロセス —中学校の指導をそのまま小学校に導入しても上手くいかない—

小学校と中学校の違いを考える前に、幼稚園と小学校の違いを考えてみたい。幼稚園では、園児は体験を通して学ぶのであり、その際の集団は、小集団である。それが小学校になると、児童は、教科カリキュラムに則って学ぶようになっていく。少し大きな集団である学級、学年での集団活動になる。特に、小学校では、学習は遊びと一体となっているので、歌、遊戯、体操などの体を動かすことを伴うことが意識されなければならない。

英語が母語である米国・英国には、親が指導する際に使える有形無形の文化遺産がある。マザーグース、四季折々の歌、童話などを通して、豊かな言語活動が行われている。外国人である日本人に適した教材精選が望まれる。

現在、特区で行われている実践から、効果的な指導実践の公開や教材・指導法・動画などの提供が望まれる。

5 作成した絵カードの紹介

(本学のレポジトリにはカラーで掲載しています。)

① 著作権フリー素材を活用した絵カード。(2016)

ネットには、さまざまな教材がある。著作権遵守のうえ、旺文社のハピラボを使用。



2 印刷用-01



2 印刷用-02



2 印刷用-03



2 印刷用-04



2 印刷用-05



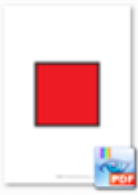
2 印刷用-06



2 印刷用-07



2 印刷用-08



2 印刷用-09



2 印刷用-10



2 印刷用-11



2 印刷用-12



2 印刷用-13



2 印刷用-14



2 印刷用-15



2 印刷用-16



2 印刷用-17



2 印刷用-18



2 印刷用-19



2 印刷用-20



2 印刷用-21



2 印刷用-22



2 印刷用-23



2 印刷用-24



2 印刷用-25



2 印刷用-26



2 印刷用-27



2 印刷用-28

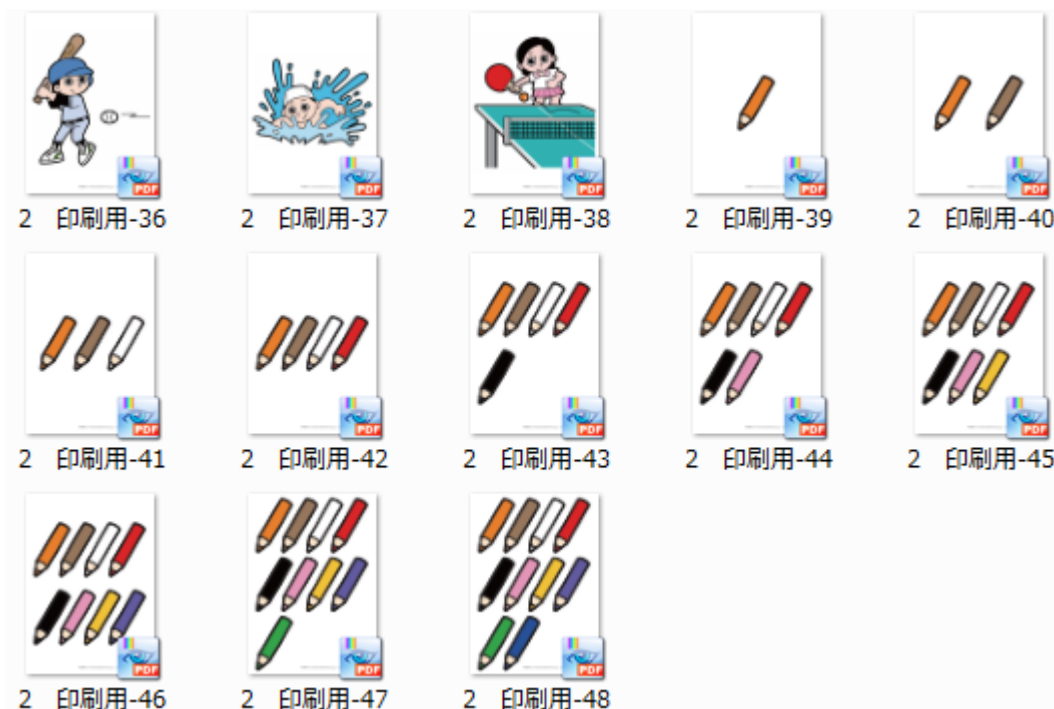


2 印刷用-29



2 印刷用-30





【習得したいこと】

好きなもの、スポーツ、数

色の概念：red, yellow, black, brown, white, green

形の概念：丸、三角、四角

大きさの概念：Which is bigger?

② 文字を教えるための絵カードの作成（2017）

- ・文字は認識しやすいもので、書くことを意識する。
- ・大文字と小文字を覚える。
- ・フォントは、丸みを帯びたサンシェリフを使う。飾り（serif）の付いてない（sans）書体のこと。

普通のフォントは、細かな出っ張りがあったり、丸みのある部分や細くなる部分があるなど複雑である。フォントを大きくしてみると以下ようになる。

通常のフォント **A a** サンシェリフのフォント **Aa**

大文字と小文字の違いがないものは、**CKOPSUVWX**くらいであり、かなり異なっている。

特に、**Bb** は同一方向であるのに、**Dd** は逆方向である。

また、海外の絵カードでは、背景や文字の色を変えて飽きないようにしてある。こうしてみると、文字が定着するための工夫も必要であることがわかる。

**Aa Bb Cc Dd Ee Ff Gg Hh Ii Jj Kk Ll Mm Nn
Oo Pp Qq Rr Ss Tt Uu Vv Ww Xx Yy Zz**



大文字、小文字のアルファベットのカードの裏には、以下の絵を印刷している。
絵で、大文字小文字が同じであることが確認できる。



③ 単語の入ったカードの作成 (2017)

文字がわかったら、単語への指導ができるように組み合わせてみた。

小文字が多く使われるので、小文字で単語を作っている。



引用資料

- 1 小学校英語の現状・成果・課題について－文部科学省
 (平成27年4月28日教育課程企画部会特別部会資料3-4 P5)
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1358061_03_04.pdf (20171010)
- 2 国立国語研究所 (1972) 「幼児の読み書き能力 p427」東京書籍
<file:///C:/Users/NS/Downloads/R0045.PDF> (20171010)
- 3 ベネッセ次世代育成研究所
 2007年5月から2008年3月に、全国の5歳児以下の保護者4,800人にインターネットで調査。
<http://www2.shimajiro.co.jp/contents/hiragana/oshiekata/index.html> (20171010)
- 4 幼児教育、幼小接続に関する現状について 文部科学省
 ベネッセ次世代育成研究所「第1回幼児期から小学校1年生の家庭教育調査報告書(2013年3月)」
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1358061_03_01.pdf (20171010)
- 5 P I A A Cが2009年実施。対象は24カ国の160,600人。
- 6 No Child Left Behind「親のためのリーディング指導法(Reading Tips for Parents)」

参考文献

- 1 田中真紀子 (2017) 「小学生に英語の読み書きをどう教えたらよいか」研究社
- 2 佐藤久美子編著「今すぐ教えられる 小学校英語指導案」朝日出版社
- 3 金菊熙「韓国の英語公教育政策の現状」松山大学、言語研究 第32巻第1-2号
- 4 ジョリーラーニング社編著「はじめてのジョリーフォニックスティチャーズブッカー」東京書籍

絵カード作成参考資料

- 1 Trend Enterprises ポケットサイズ フラッシュカード シリーズ
 「色と形と数」
 「読み方を教える」
- 2 Flash Kids 「Ready for School (Flash Kids Flash Cards)」
 「Numbers (Flash Kids Flash Cards)」
- 3 学研出版「小学英語 絵カードプリント1400 CD-ROMブック」